

私の思う寄り添った看護

「一人一人の患者さんに寄り添った個別性のある看護を行なっていきたいです」

これは、私が就職試験の面接の際に話した言葉である。今年で3年目となった私は、自分で発した言葉通りの看護ができているのか自問自答しながら看護を実施していた。

3年目になってすぐの春、40代の男性患者Aさんが入院してきた。Aさんは仕事の際に重い鉄材が足先に落下し、粉碎骨折との診断で入院した方で骨接合術の手術を行なったが、その後癒合は得られにくく後に切断となった患者さんである。

Aさんの趣味はサッカーで、Jリーグのチームのユニフォームを寝巻きにするほどサッカーが好きでした。年齢も比較的若かったことで話すことも多く、Aさんは私のことを妹分と呼んでくださるほど信頼関係を築くことができていた。

Aさんは右足の第3~5趾を切断後、皮膚の生着を待つためにしばらくの間ガーゼで創部を保護していた。Aさんは受傷後より数回手術を実施していたが、創部を自分の目で確認することは一度もなかった。急なボディイメージの変容もあり、精神的に気持ちが追いついていないのだろうと考えた。

そこで私はAさんとの会話の中で気持ちを傾聴したり、ボディイメージの変容を受け入れることができるよう創部を保護しシャワー浴を手伝ったり、散歩などの日常生活を一緒に行なった。そうした日々を過ごしていたある日の午前中に主治医より、本人が創部を見て自己処置できる様になったらいつ退院しても良いと伝えられた。Aさんはその日の夕方、最終ラウンドで訪室した私に、「今、心の準備ができた、一緒に足を見てほしい」といった。私はAさんの希望に添い、創部のガーゼをはがした。Aさんは取り乱すでもなくただ一言、「こんな感じなんだ」と言った。そしてその後「一緒に見てくれてありがとう、一緒に見てくれたのがあなたでよかった、見る前は泣くかと思っていたけど意外と受け入れられたよ」と話してくれた。

その時私は、初めて人に寄り添うことの意味を理解し、自分のAさんへの真摯な思いや行動がいつしかAさんの心の支えとなり、ボディイメージの変容を受け入れることにつながったと感じた。Aさんは無事創部の自己処置もできるようになり自宅退院された。後日、サッカーもできるようになったとのお話を、病棟に送られてきた手紙を通して知った。

個別性のある看護や、寄り添う看護というのはよく耳にする言葉である。しかし、私自身これらの言葉は抽象的であり具体性がない言葉だと思っていた。しかし、この経験を通して私は寄り添う看護の本当の意味を実感することができた。私の思う寄り添うことは、患者さんの何かしらの初めの一步を手助けすることだと感じた。人は日常生活において助け合い支え合って生きている。私は今後もこの経験を活かして一人一人に寄り添った看護を行なっていきたい。

